

《選評》 いしい しんじ (作家)

「睡蓮の横顔」。おもしろく読んだ。三十三間堂という舞台装置を、印象派の画家モネの「睡蓮」と接続するなんて、これまで考えたひとはいなかった。ロータスの造形にもう少し工夫、オリジナリティがほしいものの、主人公・顔くんのキャラクターがユニークすぎるので「あいこ」だと思った。梨華子さんは、ひだをもつ、京都らしい人物としてよく書けている。ラストのカウントダウンも効いている。物語を書きたい、という情熱にあふれたよい作品だとおもった。



「柳の枝に吹く風」。この書き手は、ほんものの、文学の芽をもっている。大きな時間を感じながら、こころのカメラアイをひらいて、京都の狭い場所を転々と旅していく、そんな読み心地。ときどき、天からさす光のような文章に、ぐっと息をのむ。その一行に出会うため、そのたのしみのために、えんえん読みすすむことができる。ぼんやりとした、曇天のような描写がつづいたかと思うと、そんな光さすことばが突然、垂直に降ってくる。

海外部門の書き手は、総じて、「この作家みたいに書きたい」「こんな作品を書いてみたい」という、大谷選手のいうところの「憧れ」がない。はじめから、自分にしか書けない物語を、ことばを削って書いていく、という覚悟を、当たり前のようにもっている。このあたりは、中高生部門、一般部門の書き手の方々も、こころして見習うべき点だと思った。

「グッドアンドバッド」。文章から文章へ飛び移っていく軽やかな歩調は読んでいて心地よい。展開する風景は、YouTubeで、ロールプレイングゲームの実況を見せられているような印象をもった。はじめからその感じを狙っているとしたら、人物の厚みがへナへナ、世界が張りぼてのようなこの世界の構成は問題ない。ただ、物語によりパワフルさを望むなら、次作は思いきってよりダイレクトに、たとえば、主人公がゲームをプレイする実況、といった小説にトライしてみてはどうだろうか。

「千紫万紅、夏の暮れ。」。男性のキャラクター造形、物語の展開は、まるでアニメ作品から直輸入したようではあるけれど、文章のリズムがすばらしい。読んでいて、ストーリーをこえて、心地よい波に運ばれていく感覚につつまれる。書き手は天性の文体をもっている（思い人の元恋人が現れる場面から、いきなりこの文体が崩れる。しばらく経つとまたもとに戻る。書き手にはわかっているだろう）。母、ひまりちゃんら、登場する女性の存在はこちらに迫ってくる。誰か、実在する誰かを思い浮かべていたとするなら、次作は、自分の身近な世界を小説に書いてみるといいと思う。

「僕と夏と君との話」。素直に小説を書こう、物語をたいせつに伸ばしていこう、というところは、読んでいて伝わる。ただ、伏見稲荷という、京都のなかでも強力なマジカルさを持つ場の力を、作品に生かしきれていないように感じた。「葉子」ひとりに、その力を担わしてしまうのは荷が重すぎる。伏見稲荷を書くなら、何十、何百回すべての鳥居をくぐった

末、雷撃のようなインスピレーションを受け、自分がお稲荷さんと同化したくらいのヤバさを自覚して書いてほしい。祖父との対話、祖母のありかたは引っかけりなく読めた。十代の不安や視野の狭さを、そのまま素直に描いてみてはどうだろう。学校内を舞台にしたストレートな青春小説など、読んでみたいと思った。

「夢の浮橋」。安定した、ゆるぎのない読み心地。その分、まっさらな作品を読んでいく、という新鮮さがなかった。古いカラーテレビでむかしの時代劇を見ているような印象だった。人物ひとりひとりの輪郭、また、背景となる町の情景は、候補作中随一というくらい正確に描きだされている。京都は古い町ではあるけれど、たえず「古さ」を更新していく、最先端の場でもある。このゆるぎない文体で、とらえどころなくうつろう現代の話を、この同じ書き手が手がけてみたらどうなるだろう、と興味をもった。

「夜な夜な」。ふしぎ、きわまりない作品。内容が、というより、読みながら、まさしくキツネに（ウサギに？）つままれたような気分襲われる。小説として、展開がばらばらになってしまいそうになるたび、なにかしら、絶妙なセンス、マジカルなひとこと、そういったもので破綻なくまとめ、次の展開へと、ふわり、着地している。造形面では、人物ひとりひとりの抱えもった事情、生きる切迫感がそれぞれ自然に感じられ、全体をとおし、豊かなユーモアがあふれているとおもった。ピーターさんがうーちゃんを投げ入れる場面など、息をのみ、笑ってしまうくらいすばらしかった。喫茶店の大きなテーブル、その風景も、いまもぼくのなかにくっきり、巨大な影を落とすままだ。この作品にはほんものの「夜」がちゃんとあった。好き嫌いはいえまいちばん好きだった。作品に書かれている以外のことばでは表現しがたい、ふしぎな魅力を持った作品。

「一菓」。選考会での評価は、はじめ、高かった。ぼくは、申し訳ないけれど、この作品については初めから点が辛かった。受験を突破した集中力が、入門した和菓子作りに生かされる、という展開はおもしろいものの、こんな短期間で、あっさり老舗和菓子屋の跡取りになれてしまうのは、どのように読んでも不自然だと思った。菓子作りに繊細な美意識が必要とされることは、作中でも強調されているが、この主人公に、そんな繊細さ、美へのセンスが備わっているとは、読みはじめから末尾にいたるまで、終始感じるができなかった。また、食文化の話なのに、味、味覚にかかわる豊かな描写がほとんど見られないのは、決定的に弱いと感じた。京和菓子の魅力が、この小説では、ほぼすべて「見た目」でしか語られていない。主人夫婦も、主人公も、コンクールの審査員も、みんなそうだ。いっぽう、菓子作りの現場など、手を動かす場面は精緻に、ありありとリアルに、しかも、ユーモアを自然とにじませて書かれている。幅のある期間をあつかう物語でなく、登山の最中、テレビ番組、スポーツの試合中など、場面を極小に切り詰めつつ、細かな心理描写を試みる、そんな小説を、この書き手の筆致、観察眼で読んでみたいと思った。

「旅立ちコーヒー」。話の運び、文章のリズムがとてもいい。お母さんはこのお母さんらしく描かれ、ミノル君はミノル君らしく小説内に存在している。モモカちゃんも、なんの銜いもなくこの町に立っている。すべての登場人物が、同じ善良さでこの世界に立っているそ

のフラットさが、小説から力強さを奪ってしまう場合がある。たとえば、物語を動かさうるにじゅうぶんなパワーを持っていないように感じてしまう。わざわざ悪辣な人物を登場させる必要はない。この書き手にはそんなことを求めている。ただし、ひとのこころを動かす作品には、常識を越えたセンスオブワンダー、ある種の狂気が、まぶされていてほしい、とも正直感じる。その箇所を「ぬいぐるみ」の語りに託しているのかもしれないが、もしそうだとしたら、作品に内在しておらず、付け足したように思った。全編ぬいぐるみ視点でもよかったのかもしれない。それほど安定した筆遣いを、この書き手は持っていると思う。

「夜の迷宮」。おもしろくないはずはないのに、惜しい、と思った。語り手の「語り」が、浅薄に感じてしまう。書き手はもしかすると、書いているあいだじゅう、本作の「しかけ」を見せたくてうずうずしていたのかもしれない。語り手がやっていることはといえば、紹介された誰かを無防備に訪ねていき、そして無思慮に淡々と耳を傾けているだけなので、物語としてはなんにも進展していかない。書き手としては、「しかけ」を明かす準備を進めていて愉快かもしれないが、そのぶん、読み心地としてはほんとうに、目の前にある紙一枚の薄さしか感じない。どうせなら最初から「しかけ」をバラしてしまい、語り手と、書かれている本人とが、追いかけてこし、模倣されたり、裏切ったり、という展開にしてみれば、書き手の思惑通りの、滋味豊かな小説になっていたかもしれない。

「高嶺で咲けるだけ喜べよ」。最後の最後までひとつのテーマを追いかけて、この分量を書ききった気概、熱量に感服した。ひとりひとりの人物も、小説のなかで輪郭をもって立っている。たしかな筆力の書き手だ、と感じた。ただ、あまたの人物たちに、書き手の主張をえんえんと述べさせてしまったことで、それぞれ人間としての奥行きが感じられなくなってしまった。ページをめくりながらときどき、ディベート大会の会場に迷いこんでしまったような戸惑いを感じるがあった。ある人間が物語のなかでどのように変わっていくか、成長を遂げるか、など、ひとりの人物に視点をしばって書いていけば、書き手の力量がより生かされるように思った。

「京都上ル下ルコル」。タイトルにまず惹かれた。読みはじめてすぐ、タイトルににじんだユーモアが生かされている、と思った。複数の視点で描かれてゆく群像小説。構成のバランスがとれており、読んでいて中だるみすることがなく、人物の造形も巧みだった。ストーリー全体を俯瞰したとき、なだらかで、無理なく自然に進んでいくいっぽう、引っかかり、盛りあがりに欠ける、と感じる向きもあるかもしれない。それも読み方の問題。弱点がなく、マイナスを抑えて物語をつづるのがきわめて巧みな書き手だと思った。無理に、とってつけたような事件を作中にもちこむのではなく、この自然さのまま文章を磨いていってほしい。おだやかな大自然のなかに幾多のドラマがひそんでいるように、みな胸を打つ大きな物語が、いつかこの書き手の前に浮上してくるはずだ。

「危険球」。群を抜いてよかった。投球シーンの緊迫感、投手・打者・アンパイア、スタンドにいたるまでの心理描写は、スポーツ小説というジャンルをこえて、文学的な普遍に達

していると感じた。選手たちをとりまく人物にも目配りが行き届いており、場面に登場していない時間にも、彼ら、彼女らは、物語世界のなかでたしかに生きている、と、そう信じられる、たしかにリアリティが充溢していた。京都は軟式野球発祥の地であり、土日の早朝には、少年野球のグラウンドを黙々とトンボでならず、野球愛にあふれた大人たち、ボールを追いかける子どもの姿が、そこここでみられる。知る人ぞ知る、京都文化のそんな一面を、情熱をこめ、あざやかに描きだしている。ひとつ希望をあげるならば、ラストの場面はグラウンドで、選手たちの姿で締めてほしかった。グラウンド外に目配りの行き届いた書き手の筆には好感をもつものの、野球ではじまった小説は、やはり野球場でゲームセットを迎えてほしい。登場する誰もが、こころにうっすらと影を抱えている。ひと夏の事件をともに引きうけ、目をそらさず対峙することで、みなのうちじょじょに光がさし、少しずつ、少しずつ、こころの曇りが晴れてゆく。書き手自身が、そんなひとりひとりに向きあい、誠実さをこめて書ききった、見事な作品だと思った。受賞、おめでとうございます。

《選評》 井上 荒野 (作家)

海外部門

「柳の枝に吹く風」

軽やかな情景描写、ちょっとしたユーモア、京都の風景やこの国での日常と、ヨーロッパの歴史や記憶が繋がっていくところなど、面白く読めた。全体的にあまり深みはないが、ときどきハッとするような文章があって、本作の魅力を支えている。

少年時の性的虐待の記憶の扱いについては疑問。ほかの事柄と同列に語られるのは、意図的なものだろうか。「このような記憶を抱えるひとりの男」の視点や感性が作品中に通底していれば、さらに読ませるものになったと思う。

「睡蓮の横顔」

主人公というより著者の、千手観音に対する感動が瑞々しく伝わってくる。モネの「睡蓮」もモチーフに使い、物語を構築しようとしている努力は評価できる。

が、小説としては未熟。ロータスの仮面の下が本人の顔であることは初手からわかってしまい、わかっている面白く読ませるだけの細部がない。主人公が孤独を克服し、自分のアイデンティティを確立していく過程が、ほとんどすべてファンタジー部分で描かれているので、納得しづらい。

海外部門の応募作にかんしては、例年、ネイティブではない方々が、日本語を駆使してこれほどのものを書いてくること、日本や京都をこれほど描写していることに感服する。ただ、その部分を過大評価することは著者にとっても本意ではないだろうと思う。小説としての完成度を重視すると、残念ながら今回は最優秀賞は出せなかった。

一般部門

「高嶺で咲けるだけ喜べよ」

ジェンダー、格差、差別についての問題意識を、小説に書くということで解いていこうとしていることは評価できる。力作であるのは間違いない。

が、ほとんど登場人物の観念だけで構成されているので、小説ではなく論文を読んだような印象しか持ち得ない。

そもそも「高嶺の花」は差別用語なのか。その疑問が浮かぶのは、「高嶺の花は差別」と書いて死んだ女子大生のプロフィールが、この小説に決定的に不足しているためだと思う。この女生徒について、彼女が死ぬまでの経緯（そもそも自殺だったのか、事件だったのか）が、それぞれの登場人物に「どう見えているのか」を具体的に書く必要があったと思う。

一番の難点は、ホームレスを「ホームレス」というジャンルのように扱い、ひとりひとりがそれぞれの人生を持った人間であるという視点が(作者に)欠けているように思えること。



©三原 久明

大雅や馬さんと、ひとりでもいいからホームレスとの会話、交流する場面が必要ではなかったか。ほかにも、性欲の扱い、自殺するのは男の方が多いのに男のことはあまり重大視されていない、という前提、高層マンションを「日本文化もわからない中国人」が買い占めているという決めつけなどに違和感を持ったが、これらは本作を「論文」として読んだとしても批判される点ではないか。

「京都上ル下ルコル」

「ゆかこ、ゆかこ」と「スタンプを押すように」上がっていくところ、「コル！」と声を上げるところなど、登山ハウツーと、それぞれの登場人物の人生がリンクして、飽きずに読ませる。読後感はいい。

が、小説としては凡庸で、突出したところはない。一話目に出てきた人を二話目の話者にする、人物の謎がほかの話で解けるなどの工夫があればよかったと思う。

「夢の浮橋」

京言葉、源氏物語など古典の引用、四季の移ろい、それを映す和菓子の描写などが、小説の情緒を盛り上げている。が、小説としてはやはり物足りなく、お菓子屋さんのパンフレットに載っている創業秘話を読んだ時のような読後感。三代にわたっての物語だが、この枚数ではあらずじになってしまっている。千造の、千歳、小松それぞれへの想いが描ききれておらず、「宇治の川霧」の切なさがほとんど伝わってこない。

「夜な夜な」

「古い井戸の謎」と、カフェに集まる常連客との関係で牽引していく。面白くなりそうな素材なのに、中盤以降だれてくる。

雄太の過去（友達の死）や、スマレが「母親と入れ替わりたい」とまで思いつめていることについて、書き込みが浅いためにとってつけたように思えてしまう。

また、「あの世と通じている井戸」を、全員がたやすく信じすぎるし、「入れ替わり」の人たちの詳細、その後の余生（？）も書かれていないので物語が膨らんでいかない。

「夜の迷宮」

架空の住所に宛てたはがきから返事が来て・・・という導入は引き込まれる。そうして京都に出かけた男が、手がかりを求めて京都の神社仏閣や旧跡を歩く様、次々と人に出会い、手がかりを与えられていくという作りは、まさに「迷宮」のようで、フィレンツェの記憶と混じっていくところなども面白く読んだ。

しかしその結果、連れて行かれるのが、「言葉によって世界は存在する」という結論（のみ）であるのでガッカリする。よく勉強して書いたのだらうと思わせるが、参考文献から抜き出してきたような考察を、すべてそのまま登場人物に言わせているような印象があり、小説としての面白さを半減させている。固有名詞をアルファベットにする意味はあったのか。「言葉が世界を作っている」とすればむしろ固有名詞を使う必要があったのではと思う。

「自分が実は自分が描こうとしていた小説の登場人物であった」という仕掛けに新しさはなく、その上で面白く読ませるためには、主人公をもっと面白い人物に描くことが必要だろ

う。持って回った言い回しは彼の個性と捉えることもできるが、行動や実際に口にするセリフは凡庸である。善人である必要はなく、キザ、偏屈、女たらしなどの造形を作り込み、彼の過去と現在を、もっと書き込んでほしかった。

「旅立ちコーヒー」

主要登場人物は全員が「善い人」で、悪人はいつでもこのコミュニティの外から現れ、たちまち成敗されるか改心する。恋愛模様ではよくある誤解が描かれ、これもたちまち解決する。あまりにも呑気で屈託がなさすぎ、「望ましい世界」、ハートウォーミングな読み物としてはともかく、小説としては成立していない。

自閉症児、自閉症児を持つ家族のリアル、ハードワークでひきこもりになった成人（父親）のリアルからは遠くかけはなれているし、ヤンキー少年たちがやすやすと良い子になっていく様は、世の中のヤンキー少年たちに対しても失礼であると思う。

「一菓」

和菓子の魅力が存分に描かれている。京都の四季の魅力とリンクしているところも良い。主人公が努力型の勉強家という設定で、筋トレをしたり粘土で餡切りの練習をしたり、和菓子について勉強するところも面白かった。商店街の人たち、紫蘇ジュースのテラーなども良い塩梅。「悪役」の佐伯をもう少し書き込んだら面白くなったのではないか。

ストーリーは典型的。最後の、死んだ息子と主人公が同じ名前であるというエピソードはなくてもよかったか、入れるとするなら前半に伏線が必要だろう。人物造型含めて、全体的に今ひとつの振り切りがほしかった。

「危険球」

一生懸命丁寧に書いているところは評価できる。球児だけでなく審判（大人）の視点を入れたこともよかった。ただ、登場人物全員が善人で、同じ人のように感じられる。谷口というボスの男が出てくると少し面白くなる。真っ直ぐなことだけではなく歪んだこと、黒い感情、余分な風景が必要だったと思う。

物語の構造は「一菓」とほとんど同じである。映画やドラマでこれまでさんざん描かれてきた、挫折とそこからの再生、父と息子の関係。ただ、「よくある話が良く書けている」という、ほかの選考委員の意見があり、そのような小説がプロの手によっても量産されていることを考えて、最優秀賞に反対はしなかった。「一菓」ではなく本作を最上としたのは、野球シーンの迫力について力説する意見になるほどと思ったからである。

中高生部門

「千紫万紅、夏の暮れ」

LGBT、あるいは愛への理解の浅さはある。けれどもそれらについて考え、理解しようとしていることが伝わってくる筆致だった。素直なてらいのない文章で、ときおり、「ん？」とマークしたくなる箇所がいくつかあった。

じゅうぶんではないが、全体的に人物がよく書けている。とくにかずさんの元恋人はチャ

ーミング。ひきかえ、かずさんの描写はやや物足りない。彼にとって京都が逃げ場であること、曖昧なものを許す土地柄であるというのはちょっとわかりづらかった。

カメラの使い方は効いていた。叶わぬ恋と知りつつひまりに告白するラストシーン、そこまでの大和の成長を描くという物語の作りも良かった。

「僕と夏と君との話」

十代らしい、シンプルな文章で、わかりやすく書けている。伏見稲荷大社へ祖父とともに登っていく場面は臨場感があり、一緒に登ってみたい、その景色を見たい、という気持ちにさせられた。

主人公の少年の内面、少年と葉子とのかかわりの書き込みが不十分である。そのために、最後の「人間は不思議な生き物だ・・・」という葉子の感慨に説得力がない。

主人公の母親が病気であるという設定も、ちょっとした飾りみたいになってしまっているのが残念だった。たとえば風景描写ひとつでも、「病気の母のことを思っている少年」の目を通して、ということ意識して書くべきだった。

「グッドアンドバッド」

幸せしか感じない世界と、不幸しか感じない世界。アイディアは面白いが、生かされていない。ふたつの世界はどのような世界なのかを、作者は徹底的に考え抜くべきだった。

設定が曖昧なままストーリーを進めていく強引さを、最初は、中高生らしいと微笑ましく読んでいたけれど、あまりにも雑なのでしらけてしまった。不幸とは、幸せとは、人が人であるとはという（あらすじにある）問いは、哲学的なものである。その答えをすぐには見つけられないにせよ、探す手つきがほしかった。

《選評》 校條 剛 (作家・評論家)

二年に一回の開催に変わった京都文学賞の第四回でどのような作品に恵まれるのか楽しみにしていました。一般部門の最終候補作が八作になったこともあり、選考委員に課された総枚数は2,300枚(400字詰換算)というなかなかのボリューム。しかし、一般部門で私が最優秀賞に推したいという作品に出会えなかったのは残念です。



一般部門の八作からコメントします。

最優秀賞に決まった「危険球」；高校野球が題材の人間の生き方を中心に描いた作品です。随所にいい言葉があります。感情きめ細かな描写も目につきます。会話のテンポ感も上々です。ラストの落とし方も上手いです。そういう意味では秀作でしょうが、私個人の評価は最優秀賞ではなく、一段階低い優秀賞でした。

物語の開始早々、京都の名門校のピッチャーでスラッガーの仁科涼馬が頭部にデッドボールを受けますが、このシーンの迫真性が物足りないと思いました。手堅く描写してはいますが、剛速球投手権田至が投げた球が仁科の頭を直撃するとき、球がうなりを挙げて伸びていく様を見たかったです。球が飛ぶ生きた音を聴きたかったのです。ストーリーのすべての出発点があるので、大げさなほど大胆な描写を期待したいところでした。小説というフィクションのリアリズムには、スローモーションで見せるような、時間を人工的に引き延ばすような技巧が必要だと考えます。

仁科については親友の葉川、権田のほうはチームメイトの牛島が語り手となって、主人公二人の行動を説明し、心理を推し量ります。もう一人の主人公たるべき銀行員にして、因縁の試合の主審を務めた、鍋島の物語も本人の目線で語られます。この三視点が主要な語り手なのですが、さらにもう三人の視点が加わる多視点小説になっています。この手法は成功していると思いました。

京都で一般的な観光名所を扱っていないことは、本作の長所とするべきでしょう。いまや既に存在しない衣笠球場や西寺など観光名所ではない京都の旧跡を扱うという着眼点はグッド。ただ、西寺を人気観光地の東寺と対照させて、西寺を権田の運命に重ねようという意図はいいのですが、図式だけに終わっていると感じました。

交通事故が二回出てきますが、安易に使ってはいけないのがこの交通事故というもの。これを道具として使うとストーリーの深みが浅くなります。それゆえ、権田の人間不信の意味づけは説得力がなかったと思います。

権田の失投が世間で炎上した原因が上月奈津子という女性の新聞投書からというのも、首を傾げざるを得ません。現代ではSNS上で炎上が常識でしょう。図らずも作者の年齢が出てしまったということでしょうが、やはり現代を背景にするときには気をつけたい点です。

「京都上ル下ルコル」；かつて低山ハイクを趣味としていた一人として面白く読みました。京都市は三方を山々に囲まれた地形なので、山歩きを題材にした着眼点はグッド。問題は文学作品としてよりも実用性が上回ってしまっていることでしょう。

「高嶺で咲けるだけ喜べよ」；毎回一作は読むことになる「京大モノ」です。京都大学とその学生生活を扱った作品ということです。今回一番に議論になってもいい挑戦的な内容でした。小説のなかで「思考」が繰り返され、既存の常識が更新されていくという実存感が本作にだけありました。他の作品はすでに世界が牢固として形作られています。本作では既定の世界への不信感が前提となっており、人間世界が決して安定したものではないという認識から出発しているからです。それゆえに、読者も登場人物とともに「思考」し、「懊悩」しながら先に進んで行かねばならないのです。

以上のような高評価を下しながらも、△印しか付けなかったのは、根本的な欠陥があると思えたからです。

まず一つは「高嶺の花は差別用語だろ」と言い残して自殺したという女性の言動からすべての物語が始まっていることです。これを「差別」と呼べるかどうか疑問ですし、それだけが自殺の原因だとも思えません。何よりも、現代では「高嶺の花」というのは、近寄りがたいほどの美人だけを指す譬えではないことです。むしろ、高額な品物や家屋などを指すことが多いのです。

もう一つおかしいと感じたのは、トランスジェンダーの主要人物が姓名の名前の読み方を変更する手続きに苦闘するエピソードです。確かに現在は、以前とは違って戸籍登録の場合（新生児など）、読みがなを振るようになっていて、それを変える場合には、家庭裁判所の許可が必要なようですが、この小説の人物が生まれた時期ではまだ強制ではなかったのでしょうか？ とすると、戸籍にフリガナが振られていないことは十分に考えられるのではないのでしょうか。しかも、日常生活では好きなように名乗っていればいいことなので、ここまで苦闘する理由が薄弱だと感じました。

以上二点の疑問ゆえに、その後のストーリーがどれほど起伏に富み、人物の造形が深くなるろうとも高い評価が難しかったのです。作者はまだお若いようですし、伸びしろが十分に期待できます。将来間違いなく世に出る人であるという確信を得られました。

「夜の迷宮」；人から人へと話を聞いて回るインタビュー小説であり、メタフィクションと呼ばれるジャンルに色分けされる作品でもあります。全編、突っ込みどころ満載の作品でした。一つ例を挙げれば、人物や地名をアルファベットの小文字にしたことです。「a」とか「b」とかで表わされる人物は阿部であっても、石井であっても何の問題もないでしょうし、読者の読みやすさを考えれば、実名のほうがずっといいはず。地名にしても、高山寺を「K山寺」にしている理由がまったく分かりません。高山寺内の「石水院」はそのまま表記しているのですから、高山寺であることは明白です。作者はメタフィクション小説であることをこのアルファベット表記で暗示したかったのでしょうか？

ストーリーに目新しい仕掛けはなく、作者には申し訳ないのですが、手垢にまみれた内容だったとしか述べられません。

「旅立ちコーヒー」；登場人物がみんないい人、善人ばかり。ヤンキーっぽい中学生三人も「根っこはいい子」となります。こうした世界観には古さを感じてしまいます。ダウン症の男の子・穰（みのる）はいい味を出していますし、その父親で中学校教員のハジメさんがうつ病で休職した理由も教育現場の状況を反映していて、納得できます。こんなほんわかしたストーリーに祖父の仇敵の不倫現場を撮影するという異物が混入しているのはいただけません。

「一菓」；今回、私の一押しは本作でした。といっても、最優秀作品としては弱いという評価ではありました。京大の経済学部を卒業して、銀行に就職したもののすぐに退職した男性が主人公です。まったくの偶然で分野違いの老舗和菓子店に見習いとして入るのですが洗い物と掃除ばかりやらされて最初は腐ります。しかし、和菓子業界の熟達者を差し置いて、店の後継者に選ばれるほど寝食を忘れて精進する迫力が凄いです。本職が書いたのではと思えるほどの専門的な知識を知識として浮き上がらせずに、ストーリーに溶け込ませて語っているのは見事。和菓子コンクールでは、最優秀賞ではなく、特別賞に選ばれるというラストも自然でいいと感じました。しかし、随所に甘さも露呈してもあります。老舗店の老夫婦の幼い頃に亡くなった一人息子と主人公の名前が同じだったという種明かしには安っぽさを感じます。そもそも偶然に入った老舗和菓子店の「店員募集」で応募して、持ち前の負けん気と並外れた精進のおかげで、和菓子職人として一流の腕前を獲得するのですが、やはりそれ以前に和菓子との結びつきがあってこそ可能なストーリーではないでしょうか。子供のときから、職人仕事に憧れていたとか、子供ながらに和菓子への執着が強かったとか、背景をしっかりとこしらえるべきだったでしょう。

「夜な夜な」；このストーリーのどこを切り取っても、「いつか見た風景」なのですね。あの世とこの世を繋ぐ古井戸を巡る因縁話には新味はまったくありません。どの登場人物も書割のように平板です。

「夢の浮橋」；これも「和菓子モノ」の一作です。時代は幕末ということですが、その時代の空気感は皆無です。本作の最大の弱点は、隣家の呉服屋の病弱な娘・千歳との愛の高まりが描かれていないことです。千歳の死後も彼女のために菓子を作り続けるという一途さに説得力がないのはそのせいです。この作者はプロットだけを頼りに小説を書いているのでしょう。人物の行動と心理に真のリアルさが欠けているのはそのせいなのでは。スティーヴン・キングは忠告しています、「プロットはウソをつく」と。

中高生部門の三作に移ります。

優秀賞「僕と夏と君との話」；ありきたりの一夏の思い出話ですが、ロケーションが伏見稲荷の真裏の家だというのがいいのです。連なる無数の鳥居を抜けて、稲荷山を登っていく

風景がいい。ほとんど、それだけが取り柄の小説です。妖怪の葉子（ようこ）との交流も特別のエピソードがあるわけではないのに、なんとなく読後感のいい小説でした。

最優秀賞「千紫万紅、夏の暮れ。」；京都は一般の道德観からはみ出してしまう人たちも受け入れる大きさがあるというのが、タイトルの「千紫万紅」に表現されているそうです。軽快な筆致で難しいテーマ（LGBTQ）をストーリーに乗せて、淀みなく表現していますが、技巧が目立つ分、読後の感銘は薄かったです。

「グッドアンドバッド」；この世は「幸世界」と「不幸世界」の二つに分かれているというパラレル・ワールド小説。オリジナリティが感じられない、他愛ない作品ですが、中学生らしい意気込みを買って、奨励作と決めました。

海外部門の優秀賞作品二作について述べましょう。

「柳の枝に吹く風」；作者はドイツ人男性。小説というより、小エッセイをまとめた作品と見るべきかも知れませんが、作者が小説と考えていけば小説です。日本語はまだまだおぼつかないのですが、鋭い感性がそれを補っていて、読み応えがありました。「場所との出会い、人との出会いと同じように濃密なものになる」と作者は述べています。京都との出会いが生んだ作品なのです。

「睡蓮の横顔」；作者は中国人男性。本作も日本語に難がありますが、必死に気高い何かを表現しようという迫力が伝わってきます。モネの睡蓮と三十三間堂・千手観音像との結びつきはあいまいなのですが、それぞれのイメージが鮮明で、読後、深く記憶に残ります。詩文のような格調を感じさせる作品でした。

二作品とも最優秀賞には及ばないという判断で、優秀賞作品といたしました。